断章

旭川のアイヌ語地名研究

(123)

高橋 基

―伊野川から忠別川までの地名⑫―

これまで四回にわたり、「交通路としての江丹別川」について述べてきた。アイヌの人たちが川筋を利用して交通路とし、頻繁に利用する川に、「ル(ru道)」が付されることを説明した。他方、松浦武四郎の記録によって、「ル(ru道)」が付かない川筋も、縦横に往来していたことも紹介した。

これらのアイヌの人たちの交通路は、最上徳内(もがみとくない)が、寛政二年(一七九〇年)に描いた『蝦夷諸島精図』を初めとして、近藤重蔵等によって調査されてきた。

松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』には、旭川のイキッカ、オテコマ、ブヤットキ等が、全道規模で各地を往来した様子が紹介されている。

さて、今年は、「松浦武四郎生誕二〇〇年」、「北海道命名一五〇年」の記念の年である。それを記念して、松浦武四郎が安政五年(一八五八年)に、上川から十勝へ山越えした、「アイヌ古道」を再現踏査する試みが、現在進行中であるので紹介したい。

松浦武四郎は、安政五年に、当連載No.106～No.108で紹介したペンケアソナイ山道を通り、チユクベツブトの番屋(ばんや)(忠和三条六丁目付近)に到着、三月九日(陽暦四月二十二日)、番屋を出発、現在の美瑛町・上富良野町を通り、富良野岳と前富良野岳のルウチシ(ru cis山の鞍部、峠)を越えて、空知川の上流へ出て、そこから十勝川筋へ山越えして、十四日(陽暦四月二十七日)に、清水町人舞(ひとまい)のアユラク家に宿泊する。

今回、上富良野町の「トカチルウチシを歩く会」(代表・山谷圭司さん)が事務局となって、美瑛町郷土史料保存会、上富良野町郷土をさぐる会、上富良野十勝岳山岳会、十勝岳ジオパーク推進協議会、NPO法人「野山人」の各団体が参加して、「松浦武四郎の十勝越えを歩く会二〇一八」実行委員会を結成。「旭川のカムイコタンから、十勝川のカムイロキへ…」の踏査を実行中である。

三月十七日(土)から、週末を利用して、四月八日(日)まで、一二〇キロメートルを踏査する。四月七日(土)は、山中で一泊して、翌四月八日(日)に新得町屈足温泉に到着の予定である。

右の踏査は、事務局を中心に、全ルートを完全踏査するグループと、一般公募して、各週末だけ部分踏査に参加することが可能な、幅広い参加態勢がとられている。

①3月17日、神居古潭神社出発

②3月24日、上川神社出発

写真①は、三月十七日(土)の神居古潭神社出発と、**写真②**は、三月二十四日(土)の上川神社の出発の記念撮影である。

右の踏査は、松浦武四郎の野帳(のちょう)(フィールドノート)『午第一番』を中心資料にし、報文日誌の『東部登加智留宇知之誌(とかちるうちし)』を補完資料として、綿密な資史料調査をした上で、山中一泊を加えた完全踏査で、松浦武四郎の十勝越えと、「アイヌ古道」の完全解明が期待されている。

なお、明治二年に、開拓判官となった松浦武四郎が使用したという『北海道国郡検討図』(北海道ホテル蔵、北海道博物館寄託)には、松浦武四郎が、安政五年に上川から十勝越えした、「アイヌ古道」が、「開削すべき道路」として、「黒線」が引かれている。この一事をみても、今回の踏査は、記念の年にふさわしい重要な踏査であり、成功を祈念する次第である。**(アイヌ語地名研究会幹事)**

※毎月第1週号に掲載します